
運命の扉

美玲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命の扉

【Nコード】

N2036X

【作者名】

美玲

【あらすじ】

誰かと誰かが出会い新しい運命の扉が開かれる。

そんな運命によって導かれ出会った2人。

これからどんな運命の扉が開かれるのか。

ちよいしリアスだけど明るくいきます（笑）

1、殻にくるまれし蝶（前書き）

遅くなってごめんなさい。

前のは違い純愛で長き恋愛を描きたいです。

1、殻にくるまれし蝶

中学卒業の2か月前

高校受験が終わった頃彼女は転校してきた。

卒業前で思い出作りを始めるクラスメイト達と違い

彼女は誰とも話をしない

いつからだろうか？

そんな君を目で追い始めたのは…

君はどうして転校して来たんだ？

君の全てが知りたい…

三学期の始業式

ガラガラガラッ

騒ぎたつ教室内にドアの音が響く。
すると皆は一斉に席につく。

「みんな、冬休みは楽しかったか？」

担任は男っぽく無駄に熱い先公だ。

休みあけに少しウザく感じるのは、俺だけだろうか？

担任はイマイチ反応しない生徒達を無視したまま話を続ける。

「良い知らせがあるんだ。」

実は今日から君達と一緒に学ぶ転校生がいる。」

これには皆がざわめき始める。

そんなざわめきに納得しながら担任は外に向けて、手招きをする。

みんなの視線が注目する中で入ってきたのは女の子だった。

男子がヒューヒュー言っても全く表情を崩さないクールな女の子

担任の指示で自己紹介を始める。

そう思ったがそれは実に呆気なかった。

「織田^{おだ} 杏^{あん}です。」

たった6文字で終わってしまったから。

「……えっと

じゃあ織田の席は1番後ろの所な。」

あまりの短さにクラス全員

そして担任までが驚き気まずい朝礼になってしまった。

今、気づいたけど後ろの席って言うのは俺の隣の席だった。

席までの道のりを歩く間に彼女に話しかける者は当然いなかった。

何も話さずに席に着いた彼女

いや杏は、話したくない

そんな雰囲気醸し出していた…

それでも隣の席の宿命は守るべきだ。

「俺さ、東山星輝^{ひがしやませいき}って言うんだ。
よろしくな

わからない事があればきけよ！」

少しこつちを向いてくれた。

「どうも。」

まあ素っ気ない事に変わりはないけど
でも素っ気ないよりも1番に思ったのが、彼女の圧倒的な容姿だっ
た。

これで少しでも微笑めば誰でもイチコロなのにな
そんな事を考えさせられるほど美人だった。

朝礼が終わり担任が出ていくと騒ぎ出すと同時に杏に視線が集まる。

なのに、誰も話しかけない
そんな空気を破ったのが杏の前の席の女の子だった。

「私、上田雪実^{うえたゆきみ}って言うんだ。
仲良くしてね。」

2つぐくりにメガネで何事も一生懸命な女の子。
そんな女の子の肩に金髪の男が手をおく。
女子の視線のほとんどは、こいつの物
まあ3割ぐらいは俺の物だけだ

「俺は、向井葵^{むかいあおい}です。」

雪実は迷惑かけっぱなしだと思っから

俺に頼ってね。
杏ちゃん。」

さりげなく手を差し出した葵だが杏は一瞬見ただけで、スルーだった。

「おい葵、またお前の毒牙にかかったら可哀想だろ。」

葵と俺と雪実をよく一緒にいる1番仲の良いダチだ
葵と雪実は幼馴染みで
葵と俺は幼稚園からのダチだから

「そんな堅い事言っなよ。
星輝だつて杏ちゃん見たら惚れちゃうだろ？」

甘い囁きを無視し星輝は杏の方を見る。

その時

一瞬

1秒も無かつたけど

杏と初めて視線があつた…

すいこまれそうな瞳

思えばこの時から俺は杏を見つめ続けてたいたのかもしれない…

授業中は特に会話する事もなく
休み時間は話しかけても何だかんだで流され、何もきけず
放課後になってしまった。

「ねえねえ今日の放課後

織田さんの歓迎会しない？

ギリギリに転校して来て寂しいと思うけど、仲良くしようよ。」

クラスの女子の中心の三田夏葉が皆に呼びかける。
みたなつは

「おっ良いじゃん。」

行こうぜ。」

星輝が賛成すると夏葉の表情が一気に明るくなる。

星輝が言い出すと葵も賛成し次々とメンバーが集まってくる。

「あれ織田さん今日予定ある？」

鞆に荷物をつめ今すぐにでも帰ろうとする杏に夏葉は話しかける。

杏はバレずに帰リたかったのか、ため息をしながら返事をする。

「いらないから。」

歓迎会とか。」

きっぱりと言いきった事でクラス内の雰囲気が凍りつく

夏葉は急に言われた一言で表情が固まっている。

「そんな言い方しなくても…」

クラスメイトが夏葉を構うようにボソツと呟くと、またため息を吐く。

「貴方のエゴの為に私を使わないで。」

さらに静まる空気を杏は無視して教室を出ていった。

杏が出ていった教室では夏葉が悔しそうな顔をしていて、早速いじめ計画がつけられてる。

女子の大群のいじめのターゲットは杏が最初では無かった。

このクラスには少し前から苛められてる男子がいる。

そいつは佐々木ささきという男子で割と元気なやつだった。

佐々木は夏葉に怪我をさせて初めてのターゲットとなった。

始めは反抗し、男子も止めにはいったが女子は止まらなかった。

いつまでもいじめ続け、今では学校に来なかったり来ても保健室にいたり様々だ。

でもさつき教室に居た佐々木は笑ったんだ。

新しいターゲットの誕生に

杏が気になって仕方なかった星輝は杏を追って教室を後にした。

怒りを煽る事も知らずに…

ダッシュで自転車をこいでいく。

今日は風が生暖かい日だった…

嫌な予感がする。

少しこいだ所で前の方に地面にしゃがみこんでいる人が目に入る。

「織田！！」

近寄り身体を起こすと身体はかなり熱かった。

意識はあるもののかなりぐったりしている。

「大丈夫か？」

声に反応し少し身体を離そうと杏が力をいれだす。
勿論離すつもりはないけど

「離して…」

大丈夫だから。」

星輝は杏の言葉を見殺して自転車に乗せる。

自分の腰にきちんと手をまわさせて、もたれさせる。

「大丈夫なわけねえだろ！

つかまつてろよ！！」

星輝は杏を気遣いスピードをゆっくりめに自転車を走らせた。

杏はしっかり手に力を入れながらいつの間にか眠りに落ちていた。

家の場所はどうしてもっているのかはわからないけど、地図を見ながらつきとめた。

信号で止まっている時、後ろをみると杏は心地良さそうな顔をしていた。

学校で見せた無表情で冷たい顔では無く、優しい顔を…

「体調が悪いなら、そう言えばいいのにさ。

そうすれば夏葉の怒りを買うことも無かったのにな。

まあ俺がどうにかするけどな…」

家につくと杏の母親は必要以上の心配をしていた。

過保護とかを超えるぐらい

そして超感謝された。

家につき携帯を開いてみる。

すると葵からのメールが入っていた。

「杏ちゃん追いかけてやってやるー」

俺の彼女にするつもりだったけど星輝が惚れたなら譲るわ。」

途中までの内容は無視して最後の部分だけ読む。

「お前が出ていった後さ大変だったんだぜ
夏葉が泣いてさ。」

男からしたら、わざとらしくて笑えるけどな。
でも雪実以外の女たちはヤベェよ。
マジ怒ってる。」

ほとんどわかってた事だけど、やっぱりか…

夏葉は美人で性格が強い

そして、何より策士で自分の使い方が上手い
煽り方を心得てる

まあ惚れさしかたは知らないみたいだけどな。

メールして止めようかと思ったが明日直接言う事にした。
でも簡単には行かないだろうな。

あいつは恐いし嫉妬深いから

俺が杏を構えば、より怒るだろうしな

翌日、少し早めに学校へ行くと杏はまだ来てなかった。

「星輝、おはよう。」

朝から笑顔の夏葉が話しかけてくる。

「おす。」

まだ何か話したそうな夏葉を無視して星輝は自分の席に向かう。
席に着くと、雪実、葵がやって来る。

それに気づき隣の杏の席を見ると、机の中が紙くずでいっぱいだった。

「どうすんだ？」

葵が心配そうに尋ねてくる。

葵も思ったんだろう。

杏をターゲットにしたくないって
そこらへんは美人の特権だけど

「とりあえず出すか？」

雪実がホウキや塵取り、

そしてゴミ箱を持ってきてくれたので、急いで中身を撤去する。
間に合ってくれ！

杏が来るまでに終わりますように

一生懸命片付けていると夏葉がやって来る。

「星輝、何してるの??」

わざとらしくきいてくる夏葉に星輝はハッキリ告げる。

「織田の事も佐々木の事も止めてくれないか？」

夏葉は織田と言った瞬間嫉妬に歪んだ顔をした。

「私、何もしてないよ。何も知らない。」

そんなの嘘に決まってるけど星輝はあえて何もきかなかった。時間の無駄だっと思ってたから。

あと少しという所で予鈴がなり杏が登校してきた。いつそ休みだったらと思っただが、そんな願いが叶う事はない。

必死に紙くずを片付けてる3人杏を見ながらニヤニヤ笑う女の子たち。

杏は席にやってきて片付けてる3人に声をかける。

「今後は何もなくていいよ。私は平気だから。」

それと東山くん昨日はありがとう。」

そう言っただけ杏は残りの紙くずをテキパキと片付けて席についた。そんな杏の表情を面白くないと、1番に感じたのは夏葉だった。

でも夏葉は何も話さない。昨日庇った子がまた夏葉の変わりに告げる。

「無表情とかありえないっしょ。
ちよっとは嫌な顔しろよ。」

昨日の控えめな言い方と違い女の子は勢いよく言ってくる。
けど杏はそんな事で怯む女じゃなかった。

「腐った奴ら。」

こんな事したって意味ないじゃん。」

それがさらに怒りを買う。

「むかつく奴の顔を見たくないんだよ。」

普通に考えれば喧嘩でも出てきそうな言葉
けどいじめで言うと言葉の重みが変わる。

「そんな事言ったって

あんた達が誰かをいじめて、その子が自殺したらどうすんの？
命の重みを知らないくせに、そんな事言ってるじゃねえよ。」

さすがに今度ばかりは女の子達も返す事ができなかった。

杏が言った言葉の重みを理解してしまったから…

この日は昼休みになっても放課後になっても平和だった。
杏にも佐々木にもイタズラをする奴はいなかったから。

放課後になるとすぐに佐々木が教室を出ていく。
そんなのを見ても誰一人として気にしなかった。

…杏以外は

佐々木が出ていくのを見ると杏は鞆を置いたまま教室を飛び出す。その異様なまでの緊迫感を感じた3人は後を追った。

佐々木を見失いキョロキョロしていた杏がどこかに走り出す。疑問を感じながらたどり着いたのは屋上だった。

今にも囲いを飛び越えようとする佐々木
そしてそれを止めようとする杏

「死んだって何も良いことなんて無いよ！」

すると佐々木は奇妙な笑い声を上げる。

「さっき織田さん言ってたじゃん。

俺はあいつらに重みを与えたいんだよ！

あいつらに苛めた事を後悔させてやる。」

あまりの闇の深さに3人は出ていく事ができなかった…
けどそんな3人と違い杏はどこまでも勇ましかった。

「死んだら後悔を見届ける事はできない。
後悔させたいんなら生きてさせろよ！」

正義と言えば正義だが佐々木にとって、それほど辛い事は無いので
はないだろうか？

「俺はもう学校に来たくない。

織田だってそうだろ？

あんな事が毎日続くと思ったら嫌になる。」

そんな弱い意見を告げた佐々木と違い杏は強く答える。
でもその意味は…深い

「嫌になんてならないよ。」

私はこうやって学校に通える事が何よりも幸せだと思っただけだからあんたみたいに命を無駄にする奴は許せない。」

杏の言葉をボソボソ繰り返している佐々木
そんな佐々木に杏は近づき抱きしめた。

「生きようよ。」

生きてれば良いことが必ずある。」

佐々木には杏が女神のように思えたかもしれない
杏はそれぐらい美しかったから

佐々木はその後理性を取り戻し家に帰っていった。

杏も同じく学校を後にした。

杏は屋上を出ていく時、俺たちに気づきながら何も言わなかった。

雪実是一直泣いていたし

葵は雪実を抱きしめていた

杏…

君はどうしてそんなに強いんだ？

命の重み

それをどうして知ってるんだ？

友達が居なくても楽しいと言い切る学校生活

なぜだろう…

今の君の姿は誰よりも強く美しいのに
誰よりも儚く感じる

すぐに消えてしまいそうな儚さ
そんな物まで醸し出している訳はどこにあるんだ？
君は誰よりも一生懸命生きてる。

なのに君は誰よりも諦めてる
その訳は？
全てが知りたい

2、蝶は秘密をも美しさに変える

いつかきいてみたい…

君が生きててよかったと思った事はなに？

俺は…君に出会えたこと

翌日からエスカレーターするいじめも杏の表情を崩す物は無かった。
悲しみはわからないみたいだが
怒りはわくみたいで

杏は時々、自分の席を誰かの机と変えたりしていた。
そういう時杏は決まって言っていた。

「彼女たちがやった事だから。」

まあ止める者もいなかったけど
何だかんだで杏を好きな人はいっぱいいたから

佐々木は杏に説得されてから毎日学校に来ていた。
いじめられても助けを求める事は無く、男らしかった。

「なあ星輝

雪実と話してたんだけど

杏ちゃんが嫌じゃなかったら学校案内してあげたいなって。」

葵が言ってきた提案は珍しくマトモだった。

「いいんじゃないか？」

星輝が杏に伝えようとしたら
葵がすでに杏に接近していた。

「杏ちゃん、今日よかったら学校を案内させてくれない？
色々と不便だと思ってさ。」

どうせ断られる

そう思ったのに杏が返したのは意外な言葉だった。

「ありがとう、助かる。」

放課後4人で校舎内を回っていても余計な事を考えてばかりだった…

葵だからオツケーしたのか？

何でこんなにモヤモヤすんだよ！

「星輝、どうかしたの？」

いつの間にか星輝は皆から少し遅れていたみたいで雪実が心配そう
にきいてくる。

そんな雪実に優しく微笑む。

「大丈夫、何も無いよ。」

心配してくれてありがとう。」

すると星輝の笑顔をみた葵がむすつとしているように見えた。
杏からは特に表情はよみとれなかった。

「今日はありがとう。
すごく助かった。」

葵だけに向けた笑顔じゃないのに何故かイラッとした。

4人で教室に戻ろうとしていると、杏の動きが遅い事に気づいた。
でも2人は気づいてないし気のせいかなって思ってたにしない事にした。

そして教室に着くちょっと前に少し杏の身体がフラフラしてるように感じた。

「織田、大丈夫か？」

雪実と葵は仲良く歩いていて聞こえないみたいだ。

「何が？
だいじょー…」

「あぶねえ！」

ギリギリ間に合い腕で杏を支える。
星輝の声に気づいた雪実と葵も近づいてくる。

「キヤー杏ちゃん大丈夫？」

大丈夫と言い張る杏に背中を向けて屈む。

「ほら、乗れよ！」

杏は意外に頑固なのか首を横にふりつづける。
その時ふと杏の言葉を思い出す。

学校へ通える事が幸せだって

「安静にしないと明日学校に来れないぜ？」

すると杏はあっさり背中につてきた。

何で学校がそんなに好きなんだろうか？

結局この日も杏を自転車に乗せて帰る事にした。

昨日みたいに倒れたら心配だし。

「なあ貧血つてよく起こすのか？」

今日は起きてるみたいなので聞いてみた。

「まあたまに。」

身体が弱いのだろうか？

あんなに強気なのに…

「もう少しで着くよ。」

静寂を破るように告げた。

すると何かボソツと返事をする。

「…たくない」

「え？」

何て？」

珍しく何かを嫌がった気がする。
けど肝心な所が聞こえない。

「…帰りたくない。」

ちゃんと全てが聞こえたけど、どうしたらいいのか…

「お母さんは過保護すぎる。

すぐ学校を休めって言っし…

今日は顔も見たくない。」

たしかに少し過保護だとは思ってたけど…

「大事に思ってるからじゃないのか？」

そう言うのと、腹あたりをギュッてつままれる。

「いてっ」

「そんな事わかってる…
でも私は…」

何か深い訳があるのだろう…

星輝は自転車で来た道に戻りだす。

「えっちょっと…」

困惑する杏

全く気にしない星輝

「帰りたくないなら、今日は俺んちに泊まってけよ。」

いきなりの事で杏は焦りだす。

まあ俺が原因だけだな…

「ダメだよ。」

そんなの。

家族の方に悪いし。」

来るって事は嫌ではないみたいだ。

「いいよ。」

言っとくし。

「一晚の話だしな。」

星輝は一旦自転車を止めて電話をしだす。

もしかしてと杏が考えてると

「母親が良いってさ。」

後は織田しだい。」と、予想通りの答えが返ってきた。

しばらく杏は考えてるみたいだった。

「じゃあ一晚お世話になってもいい？」

ケンカの後で会いたくないから。」

どうしてケンカしたのか

とか

謝れ

とかは

あえて言わなかった。

数日杏を見ていると何かありそうだと思ったから。

家につくと杏は礼儀正しく母親に挨拶をした。

「はじめまして、先週転校してきた

織田杏と言います。

星輝くんにはいつもお世話になってます。

今日は急な事ですいません。」

すると母親はにまーっとして、肩を叩いてくる。

「彼女？

凄く良い子ね。」

違うと言ってもきかない母親を無視して部屋への階段をのぼる。
後ろからついてくる杏に母親が声をかける。

「ゆっくりしていつてね。」

すると杏はペコッとお辞儀をした。

「お世話になります。」

部屋について何を話したらいいか全くわからなかった。

部屋に女の子をあげたのは、姉貴と雪実だけだから妙に緊張する。

「あっそうだ。」

母親にちゃんと連絡しろよ。」

杏は嫌そうな顔をしたが、さすがに納得してくれた。

そこまで心配をかけれない

そう思っただろう

「じゃあ電話するね。」

携帯でかけようとする杏に念のためきいてみた。

「下に居ようか？」

きいてすぐは驚いた顔をしたが、後はいつも通りの表情に戻っていた。

「そうしてくれたら助かる。」

「電話が終わったら呼んで。」と告げ階段を降りていく。

その時部屋から聞こえる少し怒った声

普段の杏からは想像出来なかった。

ダメだと思いながらも扉の前で耳をすませる。

「大丈夫…全部大丈夫だから。」

持つてるし1日だよ？

お母さんが望むなら明日の朝学校前に家に戻るから。

今日だけはほつといて。」

それで電話が終わった。

星輝はバレないように一旦下へいき、飲み物が置かれたお盆を片手に上がった。

これでバレル事はないだろう…

「お母さんいって？」

「うん、東山くんの家に泊まらしてもらってちゃんと伝えた。」

さっきの電話の内容も気になったがあえて触れず
気になったもう一つの話をする。

「東山くんじゃなくて星輝って呼んでよ。
皆そう読んでるから。」

東山くんって慣れないし。」

しばらく考え込んでいるみたいだ。

「でも下の名前で呼ぶと誤解されるよ。」

返ってきたのは意外な言葉だった。

クラス中が呼んでいる名前を呼んだ所で彼氏に思われる事は無いだ
ろっ…

「何を誤解するの？」

「私と貴方が友達だって…」

誤解

君はそう言ったんだよね？
友達にはなりたくないのか…

「別に俺は良いけど？」

すると杏は首を横にふる。

そして初めて少し心の中に触れさせてくれた。

「ダメだよ。」

いじめも、私の事情も貴方を巻き込めない。」

事情

そこに君が沢山の事にこだわる意味があるハズだ。

今はきかないけど、いずれ俺はそこまで触れたい…

「俺は覚悟できてるし。」

それにもう…あ…ん…は俺のダチだろ。」

初めて呼んだ杏という名前の部分の声が情けないぐらい震えた。

「じゃあ…呼ぶけど友達にはならないよ。」

星輝。」

初めてだった。

自分の名前がこれほど輝いてきこえた事

心地よくきこえた事は

呼ばれた感動に浸っていると母親が呼んでいる事に気づく。

「せいきー」

呼ばれて下に行くと母親がニヤニヤ笑っている。

「ごめんねーお邪魔だったかしら？」

ニヤニヤする母親を睨む。

すると母親は本題を話し出す。

「今日の晩御飯何が良いかきいてきてくれる？」

それを先にいえ

そう思ったがあえて言わずに杏の元へ戻る。

「今日の晩御飯何が良いつて？」

杏はしばらく悩みこんでいたが

何か思いついたの急に顔をあげる。

学校では気づかないけど杏って意外に表情がコロコロ変わるよなあ

「何でも良いよ。」

あの、もしよかったら手伝わせてもらってもいいかな？

何もせずに泊めてもらうのは悪いし。」

ホントはそんな事しなくて良いよって言いたいけど
ぶっちゃけ杏の料理食べたい。

「きいてくる。」

母親に杏の意見を話すと喜んでくれた。

ああ良い光景…

母親と杏がキッチンに並んで料理を作っている。

「あら、杏ちゃん手際が良いわね。」

母親は杏の包丁の使い方をみて普段から料理をしている事がすぐにわかった。

じゃがいもの皮を向きながら杏が答える。

「わたし一人っ子なんでお母さんと2人で一緒に料理作ってたんです。」

優しく微笑みながら料理していく、杏をジーっとみていた。いつまでも見ていたい…

「こら星輝。

気がちるから向こうに行ってなさい。」

怒られた星輝は膨れながらもソファーに座りに行った。そしてテレビを見ていてもやっぱり杏が気になる。母親が余計な事を言ってないかも気になる。

「ふふ。

星輝ったら奥さんの料理を待つ旦那さん見たいね。」

何気ない母親の一言に驚いた杏がニンジンを落とす。

「あら、ごめんなさいね。

でもそういうのんびりした家庭は良いわよ。」

杏はニンジンを拾い上げ洗いながら考えていた。
考えもしなかった。
結婚とか…

「はい、幸せですね。
そんな事夢みたいです。
でもきつと………ない。」

最後のひと言だけ急にボリュームがさがり途中の部分を母親は聞き取れなかった。
でも集中して料理を作っているみたいなので尋ねはしなかった。

「さあ召し上がれ。」

星輝の父親、姉貴、全員勢揃いでご飯が始まる。
友達の家泊まるのが初めてだった杏は緊張しまくっていた。
しかも今日の肉じゃがを作ったのは私だし…

「杏ちゃんは星輝の彼女なの？」

ズバツと星輝ではなく本人にきいてくる。
相変わらず真っ直ぐな奴だ。

「ちよつ姉貴。
何きいてんだよ！」

横にいる姉貴に向かって睨んでやると怯える事はなく
笑いがされた

「だってお父さんも知りたいと思うよ。」

黙々とご飯を食べていた父親が少し顔をあげ、ニヤリッと笑う。
ホント知りたがりな家族だ。

まあ俺の知りたがりも父親譲りだしな…

「星輝くんとはクラスメイトですよ。」

私つい最近引っ越してきたばかりなんで。

星輝くん、凄く親切ですよ。」

せめて友達って言ってよ…

嘘でもいいからさ

姉貴が肘をあててくる。

「残念だねえ。」

こんなに可愛いのに見込みないし。

ドンマイ。」

わざわざムカつく

2人が睨みあっていると母親が空気を変えるように言い出す。

「今日の肉じゃがは杏ちゃんが作ってくれたのよ。」

その言葉に父親がピクツと反応する。

そういえばさつきから肉じゃがばかり食べている。

「料理上手なんだね。」

凄く美味しい。」

父親が笑顔で言うと杏は素直に喜ぶ。

「気に入ってもらえてよかったです。」

他愛ない会話を挟みながら夕食は楽しく終わった。

「後で星輝の部屋に布団持っていくわね。」

「ありがとうございます。」

部屋に帰ると杏は笑顔で告げてくれた。

「良い家族だね。
凄く楽しそうで。」

何気ない会話に何気ない返事をしたつもりだった。
けどこれも心の中の1つだった。

「杏の家はどんな雰囲気？」

しばらく会話が止まり杏は考えながらひと言ずつ話し始めた。

「私の家は…みんな優しい
大切にしてくれる
けど過保護すぎる…」

そりゃそうたる

初対面の俺でもわかるぐらいの過保護っぷりだったし

「そっか
でも優しい親たちなら良いじゃん。」

星輝の言葉を否は頭の中で繰り返しながらうなずいていた。

「優しいのは良いんだよね。
うん… そうだね… 幸せなんだよね。」

まるで私は思ってたなかった
そう言いたそうな言い方

「なあさつき飲んでた薬って何の薬？」

杏は食後すぐに何かの薬を飲んでいた。
何の薬かは全くわからないけど

「ビタミン剤だよ。」

この前風邪引いてからお母さんが飲みなさいって言ってて。」

いつそ俺が鈍感だったらよかった。

そしたら何も気づかないのに…

けど人は嘘をつくとき

右上を見るんだ。

そして嘘と表情をつくりだす

「そっか…

たしかに風邪ひいたら心配だよな。」

本能的に察した

まだこれ以上は進んではいけないと

すると丁度いいタイミングで母親が布団を持ってきた。

「はい。」

星輝、話するのも良いけど

明日も学校だから早く寝なさいよ。」

またニヤニヤしている母親に素っ気なく言いきってやる。

「わかってるよ。」

この後たいした会話をせずに2人とも布団に入った。

しばらくすると杏の寝息が聴こえてくる。

違う布団とはいえ隣に敷かれた布団は近すぎて

星輝は寝れなかった。

一晩中、星輝は隣に眠る美しい女の子を見つめていた。

美しい…

そして儚い…

壊れるかもしれない

けど触れたい

星輝は手をのばし、杏の額に手をのせた。
そして少し髪をかきあげる。

「…う…ん…」

起きたと思い焦ったが否は寝返りをうつただけだった。

あつぶねえ…

俺の行動もあぶねえ

何してんだ俺

けどこれからも

こうやって幸せな顔をしている

彼女を横で見守れたら

どれだけ幸せだろう…

2、蝶は秘密をも美しさに変える（後書き）

ちよつと進み遅くてごめんね。

よかつたらこれから読んでくださいな（
）

3、蛾は無理でも蝶になりたいと願う（前書き）

何回めかの人は遅くなってごめんね。

はじめましての人は

つたない文でごめんなさい。

どちらの方にも楽しんで読んでもらいたいです。

3、蛾は無理でも蝶になりたいと願う

「う…ん…ふあゝ」

「あつ起きた？」

学校に行くには少し早いけど、きっと家に戻るためだよ。

「うん…いったん家に戻るから早めにね。」

杏は用意をしはじめる。

急に泊まりにきたので特に用意もなくすぐ終わったけど
杏の着替えの為に先に下におりる。

「おはよー星輝。」

目の下にクマがあるけど
よく眠れた？」

クマがあるなら答えなくてもわかりそうだけど
朝から殴られるのは勘弁だ。

「寝てねえよ。」

杏は寝てたけど、俺は一睡もできず。」

そう言つと姉貴はわかつてたくせに笑いだす。

「そつだよねえ。」

男は割りきれないんだよねえ。

まあいいや。

クマの取り方教えてあげるからおいで。」

珍しく優しい姉貴に驚くも

素直に従う事にした。

杏にバレたら恥ずかしいし。

「あっおはようございます。」

素早く着替えをすまして降りてきた杏は星輝がタオルを目の上に置いてるのを

ジーツとみつめる。

「ああ、顔洗ってただけだよ。」

ニヤニヤしている姉貴を放置して杏に話しかけると素直に納得してくれた。

「杏ちゃんは昨夜よく寝れた？」

またお決まりの質問をしゃがつてと、思ったが今更止める事は出来ない。

「はい。」

よく眠れました。」

姉貴は質問をしながらも朝ごはんを作っていた。杏に比べるとだいぶ不器用だけど…

「あれ、何で姉貴が作ってんの？」

姉貴は一瞬だけ星輝をみると、ため息をして作業を再開した。
無視かと思っただが
質問には答えてくれた。

「昨日、あれからお父さんが夜勤に行つて
お母さんが帰るのを待ってたから2人とも寝てるの。」

そんな姉貴を見た杏は声をかける。

「私、つくりましたよ？」

客に作らせわないと思っていたが
姉貴は目を輝かせて杏の手を握った。

「ホント？」

ありがとう。

このままだったら朝練遅刻すると思って焦ってたの。」

杏は材料を見てパッパと朝ご飯を作ってくれた。
それは凄く美味しくて…幸せだった。

洗い物をすませて家を出ようとした杏を止める。

「送るから。」

けど杏は首を横にふる。

「ダメだよ。
十分迷惑かけたし。」

そんな杏を無視して星輝は自転車を取ってきて
自転車の後ろをポンポン叩く。

すると嫌がると思っていたが杏はあっさり乗ってくれた。

「ありがとう。」

しばらく走り続け、あと少しで杏の家だと思った
その時

「星輝…ちょっと止めてえ。」

細い声を出す杏に従い止めて後ろを振り向くと杏の顔色の悪さに気がつく。

「杏顔色わりいけど大丈夫か？」

道に自転車を止めて杏の手を支えながら川沿いの土手に寝ころぶ。
草の匂いが鼻にかかるけど、落ち着くにはびつたりだろう…

「大丈夫？」

横に居る杏を見ると片手で草をいじっていた。
そして大きく深呼吸をする。

「ここいい場所だね。」

草の匂いを堪能しながら杏は笑顔で告げる。
顔色も少しましになったみたいだ。

「田舎だからな。」

こちら辺は川や田んぼがある田舎だ。
だからクラスも1クラスだけだし。
そして何よりも空気が美味しい。

「転校してきてよかった。

都会よりこっちの方が良いや。」

普通都会からきた人は逆の事をいう。

田舎は嫌だ

不便だって

けど否は…

都会で何があっただろう…

「ああ田舎の良さを教えてやるよ。」

田舎が好きだと思えたなら離れられないぐらい好きになってほしい。
田舎が好きって理由でも良いからずっとこの町に居てほしい。

「うん。

楽しみにしてるね。

星輝、そろそろ大丈夫だから行こ？」

もう一度杏の顔色を見てから星輝は自転車の方へ戻った。

時計を見ると案外時間が経っていない事に気づき安心した。

杏の家に着くと

また母親が勢いよく出てくる。

前みたいに過保護すぎる

でも1つ違うのは母親から感謝されなかった事

杏が家に入り出てくるまで何故か杏の母親と話をする事になった。

「杏は貴方の家に居たの？」

今更ウソをついても無駄だ。

ここははっきり言った方がいい。

「そうです。」

すると母親は怖い顔をして近づいてくる。

怒り

それだけを伝えるために

「どうして？」

友達ならどうして止めてくれないの？」

いくら何でもおかしくないか？

過保護なんてすでにこえている。

杏はこんな母親に束縛されて育ったのだろうか？

だったらそれは可哀想すぎる…

「俺は杏が望む事をしたつもりです。」

それにどうしてそこまでこだわるんですか？

たった一泊ぐらいで」

ききたくて仕方ない

きいた瞬間母親は何かを言おうとする。

けどギリギリで止めて家の中に戻っていく。

「友達なら今度は止めてください。
それと毎日の送り迎え感謝してます。」

急に態度を変えた母親に不審を抱くも、杏が出てきたので気にしない事にした。

「ごめんね。」

お母さんが何か余計な事言わなかった？」

特に容姿に変化は無く出てきた杏。
けど何故か疲れた顔をしている。

「それは別に何も無かったけど。」

杏こそ何かあった？」

杏が母親とあったのはおそらく一瞬だけだろう
母親が家に戻り杏が出てくる瞬間だけ
なのにどうしてここまで疲れた顔をしているんだろう？

「私は大丈夫だよ。」

行こ！

遅刻したら大変だよ。」

笑顔の裏の真実

星輝にはそれを知る権利は無かった。

学校に着くと時間はギリギリで結果2人で教室まで走る事になった。
何とか間に合ったのは良いけど視線は2人に集まるし
杏の席には落書きだらけのノートがあるし
色々面倒な事になっていた。

「星輝、おはよう。」

星輝が教室に入るといつものように夏葉が1番に話しかけてくる。
あえて杏の事は視界にいれていないみたいだ。

「おっす…」

やべえ酸素が。」

星輝とちがい杏は意外にもタフなようですぐに席に向かった。

杏は席に着くとすぐにノートをパラパラめくる。

そんな杏をみてニヤニヤ女子達は笑っている。

近づき覗くと

穢れた女

と、山ほど書かれている。

いつもなら反論する杏だが今日は何も言わなかった。

ノートを机の中にいれて

窓から外を見ている。

「星輝、そんなに見つめちゃダメだよ。

杏ちゃんと進歩はあった？」

いつの間にか横にいた葵に茶化される。

そんなに見てたかな？

「杏とは別に。

でもちよつとは近づけたと思う。」

何も言っていないハズなのに葵がいきなり抱きついてくる。

そして耳元で囁かれる。

「名前呼ぶ許可もらったんだあ。
案外進むの早いな。」

「気持ちわりい。」

耳に息を吹きかけてくる葵を振り払う。

みんなが2人のやりとりを見て笑っている。

杏も少しだけ笑ってくれた。

くだらない事をするのはあんまり乗り気じゃないけど
笑顔を見れるなら安いもんだ。

授業中杏を通して窓を見ていた。

すると白い物が空から降ってくる。

「おお

雪降ってんじゃない。」

思わず立ち上がった星輝を全員が見つめる。

今は運が悪く担任の授業で嫌そうな顔をしながら
咳払いをされた。

「東山。

元気なのは良いが今は授業中だ。

この問題の答えは？」

授業を聞かずに杏ばかり見てて答えれる訳がない。

立ち上がり焦る星輝の机に横から紙がまわってくる。

焦りながら紙に書かれた文字を声に出して読んでみる。

「2√3?」

「よし座っていい。」

今まわしてきたのは紛れもなく杏だった。
お礼を告げようと横を向くと杏は外を見ていた。

「この雪ってつもるの?」

都会から引越して来た杏からしたら雪も珍しいものの1つみたいだ。

「つもるぜ。」

あたり真っ白になるくらいな。」

その時ほんの少しだけど

杏が喜んだ気がした。

そんな杏をさらに喜ばせなくなった星輝は放課後みんなが帰る前に
声をかける。

「今日さ、みんなで雪合戦しねえか?」

星輝の声にいち早く反応した夏葉は

「する。」

と、答えて喜びだした。

別に夏葉だけを誘ったわけじゃないんだけど
なんてことを考えたが

めんどくさいので言わなかった。

夏葉は次々と女子に声をかけていく。

星輝は葵に

葵は沢山の男子に声をかけ

あつという間にクラスの大半の参加が決定した。

「杏はどうする？」

帰る用意をして今にでも帰ろうとしている杏に
声をかけてみる。

すると杏は振り向き意外なことを言い出した。

「えっ私も参加していいの？」

杏のこんなウキウキした顔を知らない星輝以外のクラスメイトの視線が杏に集まる。

けど2人はそんなことに気づきもしない。

「当たり前だろ。」

それに一緒に帰るんだし。」

二言目は2人だけの秘密だ。

「ホント？」

嬉しい。」

杏がクラスメイトの前で笑顔をみせたのは初めてだった。

ぽつと杏を見つめる奴もいれば

携帯を取り出して今にも近づこうとしてる奴もいる。

笑顔にしたい。

そうは思ったけど

杏の笑顔は俺だけのものであって
ほしかった。

誰も見とれる美しい顔をさらしてなんて
ほしくなかった

俺の考えは矛盾だろうか？

雪合戦が始まると女子達が杏を攻撃してくる可能性が高いので

星輝、葵、雪実で

まわりを固めていた。

けど女子達は杏に直接当てることは無い
諦めたのか？

その時

杏をみると

「あぶねえ！」

星輝は叫びながら杏に近づく。

「きゃっ」

ドサドサドサッ

「杏大丈夫か？」

女子達が狙ってたのはこれだったのか…

杏が隠れていた木にわざと当てて、木につもった雪を落とす。
女子達の作戦は見事大成功で杏は雪まみれになっている。

「いったあ…」

雪をはらってやると真っ白な雪に目立つ赤がみえる。
よくみると杏の膝から血が出ている。
木の根に引っかけたのか

「大丈夫か？」

別に特に意味もなく手が杏の傷口にむいてしまった。
そして後1センチ

「だめ、触らないで！」

杏にしては珍しい焦った声だった

「わりい。」

星輝は傷口に触れる行為を止めて、杏に手を差し出し立たせる。

こけた時に

ぐねったのか

少しひよこひよこしている。

消毒しなきゃならないし

仕方ないか…

杏が嫌がらないうちに

フワッ

と、杏を持ち上げる。

「ちよつやめ…」

案の定腕の中で暴れる杏をあやしなから歩いていると

「大丈夫？」

葵と雪実が声をかけてくる。

「だ、大丈夫。」

腕の中で暴れるのは止めたが
やっぱり気になるみたいだ。

「そっか、よかった。」

まじめに答える雪実と違い
葵はまた余計なことを言ってくる。

「星輝、かけー。」

怪我した女の子をあつさり
お姫様抱っこなんてしちゃってさ。」

うるせーって言ってやろうと思ったが
今も雪が降り続けているので

杏を気づかい少しでも早く保健室に運ぶことにした。

夏葉の表情には気づいていたが杏をほってまで
弁解する気はなかった。

放課後なので保健室に保健医は居なかった。
救急箱を持ち出し手当てをしようとする
と杏にあっさり止められた。

「自分で出来るから。
運んでくれてありがとう。」

嫌がったという訳ではないみたいだけど
断られたのであっさり引くことにした。
黙々と手当てをしてあっという間にバンソウコウを貼り終える。

「血つかなかった？」

やっと話しかけてくれた杏に
喜んで返事をする。

「ついてないよ。」

何でかはわからないけど
杏は今までで一番安心したって感じの表情をした。
別に俺は血恐怖症でもないし
アレルギーでもない（笑）

「血ぐらいついたって流せばいいだろ？」

杏は一瞬悩んだ顔をしたが
すぐに笑顔で微笑んでくれた。
けどいつもの笑顔とは違う気がする。
心の中では違うとでも

思ってそんな表情

「怪我しちゃったし帰るか？」

重い空気を壊す。

「うんそうだね。」

今日ならきつとクラスメイトにも怪しまれることなく
堂々と2人で帰れる。

そう思いウキウキで校庭に戻ると

星輝と杏の荷物を持った

葵と雪実

そして何故か夏葉や女子達まで帰る準備をして
2人を待っていた。

「やっと出てきた。

星輝、ずりいよ。」

そう何回も2人で帰れると思うなよ。」

葵の一言で男子達

が一斉に杏に近づいてくる。

「織田さん大丈夫？

すっげえ心配した。」

そんな言葉を次々と杏にかけていく。

仲良くなるのは良いけど

男ばかりは妬けるなあ…

「ありがとう。」

私は大丈夫だよ。」

杏が教室で見せた笑顔をまた見せ男子達は見いられていた……
そんな男子達を無視して杏の手をとる。

「いこ。」

いつもどおり2人で帰ろうぜ。」

そんなうまくいくことはなく

男子達がゾロゾロついてくる。

夏葉は星輝をおって、女の子達は夏葉をおってついてくる。

「星輝ずりいぞ。」

みんなで帰るんだよ。」

男子達は案の定邪魔をしてきたが

星輝は気にせず杏を自転車の後ろにのせる。

「星輝、抜け駆けするなよ。」

男子達の言葉を無視して進み出そうとする星輝と男子達を、
ヨロキヨロ見比べていた。

そんな星輝の前に男子達が並び行く手を阻む。

「だから、抜け駆けすんなって。」

「ああもう、うつせえな

杏は怪我してんだぜ？

少しでも早く家に届けた方が良いだろ。」

その言葉にはさすがに言い返せなかった
男子達がとぼとぼと自分の家の方向に散らばっていく。
女子達も同様だった。

そんな2人の元に残ったのは葵と雪実だけだった。

「雪実、どうするう?」

わざとらしく葵が雪実に問いかける。

そんな葵と違い雪実の答えは凄く真面目だったけど

「うん。」

私は心配なんだけど。

歩きだから迷惑かけちゃいそうだし
葵と帰る。」

「じゃあいつもどおり2人で帰りますか。」

その言葉を合図に自転車を走り出す。

「杏ちゃんお大事に。」

後ろからは風につて2人の叫び声がきこえた。
声は聞こえなくなり

いつものように2人の世界に包まれる。

緩やかで和やかで心地良い

「杏ってどこの高校行くんだ?」

前々から気になっていたことを
勇気を出してきいてみる。
期待はしないけど

「東高校だよ。」

キキーツ

急に自転車を止めたので杏は驚いてるみたいだ。
でも星輝はお構い無しに後ろを向く。

「マジで東高？」

「う、うん」

「やべえ

高校も一緒とかスゲー嬉しい。」

星輝は前を向き自転車をまたこぎだした。
後ろに居てもわかるぐらいの喜びを背負いながら

「東高校に行く子は少ないってきいたんだけど…」

杏の問いは一理ある。

うちの中学の大半は西高校に行く。

東高校は西高校より少し遠いし偏差値が高いから

「そうなんだけど

俺と葵はバスケがしたいからさ。

雪実はマネージャーだけだな。

後は夏葉も一緒だ。」

夏葉

その文字を杏は無視しながら会話を続ける。

「バスケット好きなの？」

「おう。」

中学3年間バスケット一筋だ。

杏はバスケット好きか？」

杏は少し悩んだみたいだが
すぐに返事をしてくれた。

「好きだよ。」

バスケット。」

杏の言葉にまた星輝は喜びを醸し出す。

杏は単純だなあと思ってた。

でも単純な人の方が良いかもしれない。

「じゃあみんなバスケットしようぜ。」

卒業するまでに体育館でも借りてさ。」

ウキウキそんな一言で表せそうな感情

どうして彼はここまで私にしてくれるんだろう？

そんな問いを杏は自分に何度もたずねていた。

キキーン

「ついたぜ。」

答えのない問題を考えてる間に家に着いてしまった。

「今日もありがとう。」

軽く笑顔を向けただけで照れる。

私がいた場所には居なかった男子

下心だけを考えず私を1番に考えてくれる。

「おう気にすんな。

じゃあまた明日な。」

キキーツと音をたてながら彼は来た道を引き返して行った。

方向反対なのにわざわざ毎日送ってくれなくても

星輝は1人自転車に乗りながら考えごとをしていた。

もちろん杏のことで

杏は最近、クラスメイト（野郎ども）とも馴染んできてる。

けど俺も含めて

必ず一線を引かれてる。

親しくはする

けど一線は越えない

未だに友達と認められてないし

ただのクラスメイトって地位は嫌だな

そんなことを家についてもずっと考えていた。

♪
♪
♪

携帯からメールの着信音になる

「誰だあ？」

寝転がっていたベッドから起き上がり携帯を手にする。

メールを開いた瞬間

背筋がピンとのび

いつの間にかベッドの上で正座をしていた。

初めてだ……

やべえめっちゃ嬉しい

そう思いメールを開くと

く明日用事があって学校に遅刻するので先に行ってください。

杏
ゝ

ちえつ

連絡かよ

まっメールってそんなもんか

でもこのままだと明日は一緒に行けない
けど遅刻はさすがに…

「何だったら途中で学校抜けて迎えに行こうか？」

割と真面目に考えた答えだった

一緒に行きたくて仕方なかったし

メールはすぐに返ってきて
また着信音になる

けど待ちきれず着信音がなった瞬間携帯を開けた

「そこまでしてもらったら悪いし

それに大丈夫だから

じゃあまた明日」

完璧な流し方

これ以上言わせないって感じがする。

にしても用事って何だろうな…。

用事って言い方だからきかない方がよいな

翌日

杏を迎えにいく時間に出てしまったため

学校には遅く早くついた。

そのため屋上で仮眠をとることにした

今日は快晴だから

冬でもなんとか寝れそうだ

ちょっと寒いけどまあ大丈夫だろ

あっという間に眠りの世界に落ちていった

タンタンタンッ

誰だ？

階段をのぼっているのは

夢？それとも現実？

カチャッ

ドアが開く音がする

「星輝見つけ。」

その声にやっと現実に取り戻された。

杏より高い明るい声

まだ空を見ながら女の子に告げる。

「夏葉、何のようだ？」

そう言っていると夏葉は手に持っていた膝掛けを俺にかけてくる。

「こんな所で寝てたら風邪引いちゃうよ。」

膝掛けは、いつの間にか冷えていた身体に心地よい温もりを与えてくれた。

親切は嬉しいがそろそろ教室に戻る時間だ。そう思い膝掛けをたたんで立ち上がると

ポスッ

身体にさらなる温もりが与えられる。

不意打ち

避けるすきが無かった

「おい夏葉、離れろよ。」

傷つけないように口調をやさしめに言ってみた。

けど夏葉はくつついたまま離れない。

「おい！」

少し強めに言うことやっとな俺の胸から顔をあげる。
完璧なほどの上目遣い
涙が零れそうなるうる加減

「好きなの。
わかってたよね？」

夏葉が俺を好きなことなんて皆知ってる。
けど俺は…

「夏葉はすっげえいい女だと思うよ。
けどな俺は好きな人が居るんだ。
わりい。」

少し強引に、でも優しく夏葉を身体から離す。
夏葉は下を向いている。
雪も降っていないのに夏葉の足元に雫がおち、地面を濡らす。

「何で？
私の方が星輝を知ってるのに。
私の方が…。
私のこと嫌い？」

「嫌いじゃないけど…。」
好きでもない

そう言おうとしたけど星輝に女子を泣かす勇氣は無かった。

「そっか。」

じゃあまだ私にもチャンスはあるよね。

私、負けないから。」

そう言つて夏葉は階段を降りていった。

一人残された屋上は初め以上に寒かった。

すると丁度予鈴が鳴った。

3限目から遅れてきた杏

別に星輝と杏はただのクラスメイトだ。

けど星輝は夏葉に抱きしめられてしまったことを
ひきずりこの日は杏を見ることが出来なかった。

帰りもただおくっただけで会話はなし。

ホントは遅刻の理由

ききたかったのに

会話のない時間は凄く長く感じた。

いつまでもいつまでも続きそうな長さ

でもひたすら耐えることしか出来なかった。

家帰るとずっと部屋にこもっていた。

あーもう何がしたいかわかんねえ

ギュー

「ぎゃーてめえ何してんだ!」

「うるさいなあ

星輝は俺が認めた男なのに女みたいな声あげんなよ。」

そんなこと言われても全く気づかなかった。

階段をのぼる音もドアをあける音も全く聞こえなかった。

「葵、とにかく離れろよ。」

そついうと元々ふざけてただけみたいで

すぐ離れてくれた。

でもハグされて思い出したくないことが頭に戻ってくる。

「うん、どうかしたか？」

また自分の世界に入りかけた星輝に葵が話しかけてくる。

でもそんなの聞こえない

俺は夏葉とハグしたんだ…

手に触れたんだ…

そのことに気がとられ葵のことはすぐに頭から出ていった。
けど…

「ぎゃー何しようとしてんだ。」

近づいてきた葵を勢いよくぶっ飛ばす。

「いつてえ。」

星輝がハグしても返ってこないから

キスで呼び戻そうとしただけじゃん。」

さらりと告げられて違和感が無いように感じるが

俺も葵も男だ

野郎にキスされてたまるか
まあおかげで現実に戻れたけど

「まあそれは置いて
何か用があつたのか？」

そう言うと葵は首を横に降りながら漫画を漁り出す。
人のベッドで人の漫画読みやがって図々しいやつ。

「なあ星輝、何かあつたのか？
朝、夏葉と教室に入ってきてからおかしいぜ。」

ちよつとずらしたつもりだったけど
校門から近い階段とは別方向から降りてきたから
バレてたか…。

「何もねえよ。」

素っ気なく冷静を装って返してやった。
でも葵は賢い

こんな嘘簡単に見破られるに違いない。
まして真横にいるやつに嘘つけるほど
ポーカーフェイスじゃないし

「俺がわざわざ来てやってんのに…」

はっ今こいつ何て言った？
漫画を読みながら葵は向こう側を向いてしまった。

「おまえまさか…」

「そのためだけに来たのか？」

率直にきくと葵はいきなり漫画を放置してドアの方へ向かう。

「お邪魔しました！」

今にも出ていきそうな葵をひき止める。

「相談乗ってくれるか？」

葵は何も言わずにまたベッドに行き漫画を読み出した。

夏葉のことを全て包み隠さず話す。

葵は途中で口を挟むことなく全てをきいてくれた。

まだ助言も何も言われて無いけど話しただけで一気に軽くなった気がする。

「俺さ今の断りかたでよかったのかな？」

すると葵はやっと漫画を置いて真っ正面を向いて向き合ってくる。

「男はさ本気で好きじゃない女には嫌いって言ってあげなきゃならない時もあるんだよ。」

それが相手のためだ。

「ちゃんとええ！」

さすが女に告られまくってるだけあって扱いになれてるらしい嫌いか…

「ちょっと考えるわ。」

この日葵が帰ってから星輝は夏葉と杏のことを考えてた。
どうするのが一番良いのか一晩中考えてた…

4、蛾の美しき蝶への道

星輝は翌日杏を迎えに行くのを断り
杏が学校に来る前に夏葉を呼び出した。
昨日告白された屋上で全てを終わらす。

「おはよ。星輝
用ってなあに？」

相変わらず笑顔の夏葉
ホントは誰も傷つけない
けど俺は…。

「朝からわりいな。
ちゃんと言ったことと思って
昨日チャンスはあるって夏葉言っただろ
でも無いから。」

全てを告げたとき吹いた風はいつもの何倍も冷たく感じた。
誰かの悲しみをのせてるように寒い

「私のことそんなに嫌いなのか？」

今にも泣き出しそうな目を向けられる。
違うって言うってあげたくなるか弱い女のこの目だ

「嫌いじゃないけど、夏葉を恋愛対象にみることは絶対ない。」

これが星輝の出した答えだった。
さすがに星輝に嫌いとは言えない。
だったら俺は俺なりの答えで言いと思う
フラれて女は強くなるべきだしな
まあ理想にすぎないけど

「私絶対織田さんより星輝のこと見てる自信あるよ！」
きつと杏にとって俺は1人のクラスメイトにすぎない。
でも俺はきつと夏葉を愛せない

「もしな、お前の言葉に甘えて俺とお前が付き合っても
俺はお前を愛せない
お前の行動をとおして杏を思い出す」

ホントはここまで言いたくなかった。
でも俺にとって夏葉は大事なダチだから
新しい恋してほしいから。
夏葉の目から涙がこぼれる。
止まらない涙

夏葉を見ながら星輝は優しさをこらえた。
今もし優しさを向ければ夏葉が傷つくことを知っていたから

「何で？何で？」

狂ったようにきいてくる。
でもその問いには答えなかった。
まだ自分にもわからなかったから
涙を流し続ける夏葉をおき1人屋上を後にしようとした星輝

「好きでいるのも迷惑？」

高校も同じなのに忘れるなんて出来ないよ。」

激しい恋心

星輝は夏葉の心の深さを知った。

夏葉は今までに何度も俺を思っで涙を流してくれてたのかな？

そう思うと少し愛しさをおぼえる

これは愛に繋がるのか？

恋愛対象として見れてるのか？

わからない

「迷惑とは言わないさ。

でもな叶わない恋をし続けるのは辛い

俺は夏葉に俺を思っで泣いてほしくない。」

優しく言っでたつもりだった

けど夏葉はますます涙を流した。

「そんなこと言っでたら…。」

涙を流していて悲しそうなのに

どこか怒りが見える。

キッて睨まれてる気さえする。

「えっでどうかしただ？」

パンツ

一瞬何が起きたかわからなかった。

涙を流しながら自分の右手を左手で夏葉は握りしめていた。

ヒリヒリする左頬
そっか叩かれたんだ

「フルなら優しいこと言わないでよ。
嫌いだって言つてよ！
大嫌いだって…。」

いつもの強気な顔とは違いポーカーフエイスは崩れてる。
バレない程度のナチュラルメイクは存在を主張するようにボロボロ
けど今までみた夏葉の中で1番綺麗だと思う

「俺、嫌いじゃない人に嫌いとか言えないし。」

正直に言つたのに夏葉は全く救われた顔をしてくれ無かった。
さっきと同じ悲しみと怒りの顔

「そういう所大嫌い！」

そして夏葉は去っていった…。

夏葉が去るとき俺は空を見ていた。

夏葉の降りていく足音だけが聞こえると思ってたのに

パンッ

さっき俺が叩かれたときと同じ音がする。
そして屋上のドアが開かれた。

「葵か？」

夏葉が叩ける人で俺が親しい人といえば葵だろう

「ああ…。」

予想はやっぱり当たってた。

気まずそうに隣にやって来た葵

初めからきいてたんだろう

偶然じゃなくてわざと

きっと俺を心配してくれてるからだと思うから怒りはしない。

「その頬どうしたんだ？」

叩かれたのはわかるが何故かはわからない

夏葉は普段は叩かないし

葵が何か言ったことぐらいわかる

「誰かのせいで珍しく泣いてたからさ

肩に手を沿えて耳元で囁いたら叩かれた。」

落ちそうなシチュエーションを簡単に言う葵

まあいつものことだが

でも囁いた言葉に怒ったんじゃないのか？

「何て言っただんだ？」

葵がニヤニヤ笑いながら答える。

何かちよつとそのエロいことな気がする。

「俺が心も身体も温めてやるよって言ったただけだけど」

普通だろと言いたそうな葵を無視する。

大人みたいなことさらつと言いやがって
むかつくやつ

普通免疫無かったら叩くだろ。

「そんなに慣れてていいな。

女の扱いに悩まなさそうだしな。」

そう言うともるでわかってたように

腕を肩にまわしてくる。

「たしかにちよつと断り方は傷つけてた。

でもな夏葉はそんな星輝が好きだったんだよ。
それにな俺だってどうにもならない女もいる。」

傷ついたのは夏葉なのに

俺の心をも傷つけてた

葵の優しさが心の傷にしみていく。

じんわり暖かさが広がる

嬉しいけど有難いけど

「野郎に慰められても嬉しかねえよ。」

腕をふりはらって屋上を出ようとする。

すると

「心だけじゃなくて身体も慰めてやろうか？」

笑いながらきいてくる。

意地悪なやつだな

くだらないことききやがって

「じゃあ慰めてくれよ。」

これにはさすがに驚いたのか葵が固まっている。
予想外でしたって顔に書いてるし（笑）

「お、おれさ男はちょっと。」

珍しくうろたえる葵に心の傷なんて忘れて笑い転げる。

「ばっかじゃねえの。」

たまには俺とデートしようぜって意味」

意味をきくと葵は相当驚いていたのか
屋上に座り込む。

そんな葵の横に星輝も座りこんだ。

そして葵の肩に手をまわした。

さつき葵がしてくれたように肩を組む。

ありがとうの意味を込めて

この日授業中や休み時間杏を見つめる時に夏葉を見てみた。
強気だけど今日は弱い気がする

でも今日の夏葉がたぶん1番好きだ。

恋愛的な意味じゃないけど、人として

放課後になり杏をいつも通り自転車に乗せる。

葵と遊ぶのは杏を送ってからだ。

昨日と違いナチュラルに接することが出来てる気がする。

「星輝はさ、何で何もきかないの？」

いきなりきかれた質問の意味があんまりわからなかった。
ただわかったのは杏の様子が違うこと
後ろに乗っているのは学校に来たばかりの孤独な杏だった。

「どついう意味だ？」

そついうと杏は少し迷いだす。
きいてきたのは杏なのに

「私のこと知りたいって思わないの？」

びつくりした

言われた瞬間急ブレーキをかけそうだった。
もしかして杏は全て気づいてるのか？
俺の気持ちに

「知りたいよ。」

でも杏が話したいと思った時でいい。」

すると杏は安心したように星輝の腰あたりにギュッと抱きついてきた。
嬉しいけど

縮まらない距離がある気がして寂しい。

「じゃあまた明日な。」

明日はちゃんと迎えにくるから。」

「うんありがとお。」

また明日。」

星輝はきた道を戻りだした。

俺にとっていつの間にか学校から杏の家までの道も
通学路になっていた。

家につくとすでに葵がベッドの上で漫画を読んでいた。
勢いよくドアをあけ葵から漫画を奪い取る。

「何だよ。」

漫画ぐらいいいだろ！」

まあ細かいことで怒る気はないが
くつろぎすぎだろ。

床にブレザーを脱ぎ捨て
制服のシワを気にせずベッドの上でコロコロして
ここは葵の家じゃないし
今に始まった行為では無いんだけど…。

「なあ葵。」

今日泊まっていけないか？」

ホントはそんなつもりじゃなかったけど
杏のことを話せるほどの親友は葵くらいだ。

「良いけど。」

杏ちゃんと何かあったか？」

相変わらず女関係の話は強いな。

星輝は葵に帰りの話をした。

私のこと知りたくないのか？ってきかれたこと。
ギョツとされたこと
全て

「なるほど。」

もつとめんどくさいのかと思ってたけど
案外普通だな。」

人が杏にバレてるのか焦ってたのに
簡単に流しやがって
そう思ったけど相談を持ちかけたのは自分だから我慢することにした。

「それはたぶんあれだな。
気持ちに気付いたんじゃないくて
重ねてるんだ。」

「重ねてる？」

「ああ」

そう言うとき葵はまた漫画を手にとり
寝転びながら話し始める。

「あれだけ美人だから前の学校でもモテたんだろ。
で、沢山の男子が杏ちゃんに質問をしまくった。
で、星輝も男子だからひとまとめにされたってわけだ。」

葵の簡単すぎるまとめ方を頭の中で何度も繰り返してみた。

前の学校の男子

俺も男子〃…！

「そういうことか！

俺も前の学校の男子みたいに質問攻めにすると思ってただけか。」

答えを導くと葵はため息をはいた。

「だから今そう言っただろ。」

「お前の説明わかりにくいからさ。」

この夜、杏のこと、バスケのこと、高校のことを話し合った。

「お前ってさぶつちゃけ杏ちゃんとどうなりたいの？」

もう日付が変わり、外は暗い。

この時間にやっと目的を葵は話し始めた。

ベッドに寝転び天井を見上げた。

居ないけど杏の笑顔が浮かぶ。

「俺は…杏に笑顔でいてほしい。
今もこれからもずっと。」

俺の願いはこれだけだ。

たまに見せる悩んだ顔は嫌いだ。
心からの笑顔を常に見ていたい。

「そっか。」

彼氏になりたいわけじゃないんだな。」

「なっ何でそんなこと言うんだよ。」

別に俺は…。

お前はどんなんだよ!」

いつも杏を見るたびに褒め称える葵
前から思ってた。

葵は本気で杏に惚れてるんじゃないって
悔しいけど葵は手強い男だし
俺が認める男だからな。

「俺は何とも思ってたないよ。
美人は一晚で十分だ。」

焦ってる星輝とか違い葵は悩まずあっさり答えた。
嘘をついてるようには見えない。

「一晚って…。
お前好きな女いないのか?」

長い間葵というが、葵の好きな人の話なんて聞いたことがない。
常に女とは一線がある感じで
唯一自然なのは雪実の前だけだ。

「俺は…。
どうだろうな」

話すように見えたが葵は笑顔で誤魔化した。
何か俺にも話せないことがあるみたいで
何だか遠くに感じた。

「好きな人と言えば雪実の話も聞かないよな。」

話題を変えることにした。

このままだと気まづくなる気がしたし
でも雪実って言った瞬間

葵の眉が少し上がった気がした。
まあ気のせいだろうけど

「そうだな。」

あいつが誰かを見てることないな。
ふあ〜。

ねみい。俺そろそろ寝るわ」

さっきまで普通に話してたくせにいきなりアクビをしだす。
今話し終わらしたか？

「お、おう。」

夜更かしさせて悪かったな。
じゃあおやすみ。」

葵は雪実をどう思ってるんだろう
いつか話してくれると良いな
俺らはダチだし

俺と杏の関係か…。
高校まで一緒にいれる。

けどずっとこの距離は…切ない

遠ざかることはあっても近づくことは出来ない

好きって言えば何かが変わるのだろうか？

俺にはそうとは思えない

伝えたら関係は壊れる気がする

伝えたとき俺が全ての男子と同じになるときだろう

今日みた孤独な杏は見たくない

だったら少し切なくても

このままでいるべきなのか

誰かこの答えを教えてくれ…。

5、美しき蝶の過去は悲しみから始まる（前書き）

タイトルとか色々変更しました

5、美しき蝶の過去は悲しみから始まる

「おはよ！」

「おはよう星輝。」

今は杏の家の前に居る。

今朝葵とは俺の家の前で別れて1人杏を迎えに来た。

葵も誘ったが葵はいつも雪実と行ってるから断られた。

まあ良いんだけど

2人つきりでもさ

いつも通り自転車の後ろに杏を乗せる。

「あっそうそう今日さ放課後葵と雪実と一緒に近くの公園に

バスケしにいくんだけど

杏もどう？」

部活が引退したからといってサボると身体がなまる。

だからゴールがある公園によくバスケをしに行く。

「うーんどうしよっかなあ」

悩んでる杏に無理強いする気はない

けど正直来てほしい

バスケしてる所を見てほしい

「体育館じゃなくて悪いけど

公園にもバスケのコートがあつてさ。

雪実の話し相手がてらにでも来てくれないか？」

俺はセコい人間だな。

ホントは雪実じゃなくて俺のためなのに。

こんなだから友達以下なのかな

「そついうことなら。

歩いて行ける距離？」

「雪実は葵が

杏は俺が自転車に乗せてくよ。」

「わかった。

楽しみにしてるね。」

辺りはいつの間にか学校の生徒がちらほら歩いていて

同じ学年の人は2人を見ている。

ヤバッ

俺ら2人共意外に有名人だからな

「そろそろ降りるね。

毎日ありがと。」

杏も同じことを察したのかすぐに自転車を降りた。

自転車を降りるとすぐに1人の人影が近づいてくる。

タイミング良いのか悪いのか

「星輝おっはよー。

織田さんもおはよつ。

教室まで一緒しよっ！」

夏葉はわざとらしく俺と杏の間に入ってくる。

杏は全く気にしてないみたいだけど。

2人の時間があっさり壊された。

「おっす...。」

暗めに返しても全く気にせず笑顔を返してくる。

そんなビミョーに気まずい空気の中に明るい空気が混ざりあう。

「みんな、おはよっ。」

杏ちゃん今日も可愛いね。」

いきなりナンパみたいな行動を取る葵の頭を雪実が叩く。

「いてっ」

「朝から何言ってるの！」

仲良く視線を気にせず2人乗りをしている。

叩かれたのに葵はどこか楽しそうだ。

夏葉はあれ以来葵を露骨に嫌がっていた。

話しかけないし

葵がいると離れていく。

今朝も葵が来ると教室まで走っていった。

「あれ」

俺最近夏葉に避けられてるかも。」

まるで理由がわからないみたいな言い方をするけど
絶対わかってるだろ。

雪実はそのな葵を無視して自転車から降りる。

「杏ちゃんおはよう。」

星輝から放課後のこと話きいてるよね?」

「うん行くよ。」

私でなければ話し相手になるよ。」

ぱーっと顔を明るくする雪実に杏もつられて笑顔になる。

「やっぱり女のこの笑顔は良いねえ。」

また杏を見ている葵のネクタイを引っ張る。

「さっさと行くぞ。」

毎日繰り返される時間

杏が来てから何気ない時間の楽しさを実感させられた。

～昼休み～

少し暖かいから4人でお弁当を持って屋上に行こうとすると夏葉に
声をかけられる。

「バスケの参考書持ってない?」

杏達には先に行ってもらった。

いきなり言い出す夏葉の言葉に首を傾げていると
具体的に話してくれた。

「高校に行ったらバスケット部のマネージャーになりたいの。
だから今から勉強したい。」

誰のためにとか

目的はあえてきかない。

葵もいるバスケット部に入ろうとしている夏葉の一途さは申し訳ない気がする。

でも片思いは個人の自由だ。

「わかった。

明日持つてくるわ。」

「うんありがとお。」

ルンルン

そんな感じで夏葉は女子達の輪に戻っていった。

屋上に入ると葵が杏と雪実に挟まれて楽しそうな顔をしている。

まるで邪魔者が来たような視線さえ向けてきた。

でもあえて気にせず堂々と杏と葵の間に入ってやった。

何か言ってくるかと思っただけど葵は夏葉との話に興味津々だ。

「なあ何て言ってたんだ？」

「ちょっと葵

プライバシーだよ。」

思いやりにかけてる葵を雪実が止める。

けど気にせず話した。

別に隠す必要のあることは1つもない。
それに試したかった。

夏葉の話をした時の杏の表情を

全て話し終えて杏をみる。

杏は俺の視線に気づいてくれた。

でも言われたのは意外な言葉だった。

「嫌がらせとかするから性格悪いのかなって思ってたけど
本当は一途で可愛い女のコなんだね。」

まるで応援したい

そんな言い方をされる。

杏の一言は溶けることのない

氷柱のように俺の胸に突き刺さった。

葵の同情の眼差しも

今の俺には胸を突き刺す道具でしか無かった。

放課後まで頭の中は昼休みの会話がフラッシュバックされるばかり。
授業なんて頭には入らない。

けど放課後の練習のために無理矢理頭の中をリセットすることにした。

放課後

それぞれ自転車に乗せて走り出す。

いくらマフラーをしていても

2月末の気温は頬を冷たくさせる。

ただ杏の腕がまわされた場所だけが
真夏みたいに暑かった。

公園は自転車で10分くらい走ればすぐつく。

こちら辺では珍しくコートみたいにゴールが2つある大きめの公園だ。

学校が終わりすぐに来たので

幸い誰も練習をしていなかった。

「よしっ久しぶりにやるか。」

軽くウォーミングアップするとボールをドリブルする。

独特のドの音がリズムよく流れるのが心地良い。

それは杏も同じだった。

「雪実ちゃんはいつも練習に付き合ってるの？」

マネージャーとかしたこともない杏からすると1人はヒマだと思えて仕方なかった。

「うん。」

2人がバスケットしてるの見るの好きなんだ。

凄くカッコいい」

確かに私もそう思う。

いつも笑顔の2人も良いけど

真剣にバスケットをしている2人は妙に男らしい。

綺麗な曲線を描き入るシュートは見ている人を惹き付ける。

「雪実ちゃんも大変だよな。」

葵くんモテるし。」

2人を真剣にみてマネージャーらしくメモをしていた雪実が

杏の一言に驚きメモを落としそうになっている。

「えっと…別に大変なこととか無いよ。」

幼馴染みって皆に説明するまでは、確かにいじめられたりするけど。

「

あくまで2人について話し出す雪実には杏はさらに言いたいことを具体的に話す。

「そうじゃなくて好きでしょ？」

葵くんのこと。」

バサバサバサッ

雪実には手に持っていた物を全て地面に落としてしまう。

幸い2人はバスケットに夢中で気がついてないみたいだけど。

雪実が落としたファイルなどを一緒にしゃがんで拾っていく。

雪実の字で細かくかかれた1人1人のデータ

特に葵の分は凄く細かく分析されている。

「いつから知ってたの？」

霜焼けか照れかはわからないけど

雪実の顔は真っ赤だった。

真面目な彼女の女のこらしい一面は凄く魅力的だと思う。

きつと葵くんも、そう思ってるハズ

「うっん出会ってすぐかな。」

葵くんの雪実ちゃんへの態度は特別だもん。」

全く気づいてなかったみたいで凄く驚いている。

「私可愛いって言われたことないよ？」

今まで不安だったんだろう

小さな声でつぶやく。

ふんわりとした和やかな雰囲気

他の女のコと違う癒しの空間を彼女はつくってくれる。

「きっと簡単に可愛いって言えない相手なんだよ。」

ガールズトークでつくられた和やかな雰囲気がいきなり崩された。
勢いよくコートを囲むフェンスが揺れた。

ガシャガシャッ

「俺らが使っただよ。」

どいてもらおうか！」

いきなりケンカでもしそうな雰囲気に怯えて雪実を見ると
大丈夫だよって笑顔を向けてくれた。

星輝と葵は慣れてるみたいで

ボールを片手に相手に近づいていく。

「じゃあルールに従ってやりますか。」

「ルールって？」

はじめて来た場所のルールなんて杏にはわからない。

すると雪実が説明してくれた。

「ここら辺でコート付きの公園はここだけだからよく練習に来る人がいるんだ。で、もめないように」

バスケで勝負して勝った方がコートを使えるルールなの。」

スポーツマンらしくねと雪実は付け足した。

確かに相手も従ってコートに入っていく。

問題なさそうに見えたが意外な所に問題があった。

「じゃあ3 on 3しよっぜ。」

相手が言い出したのは3対3の勝負だった。

「は？」

俺ら2人しかないし。

そんなの不公平だろ。」

星輝と葵は反抗するが相手は聞く耳を持たない。

「やらないなら不戦勝で良いかな？」

ニヤニヤとセコい顔をして笑っている3人組チツと舌打ちをする2人

「仕方ねえ2人でやるか…。」

そうは言っても3人と2人と同じくらいの背で簡単な話ではない。雪実はずで手を震えさせていた。

怒りか怯えか

わからなかったが本人がすぐに答えをくれた。

「私が入るよ！

下手だけど出来ないことはないし…。」

マネージャーはしているが雪実はず運動は得意ではない。

そんな雪実が入っても邪魔なのは本人が1番わかってるはずなのに言い出したのは悔しくて堪らなかったからだろう。そんな重い役を雪実はずに背負わせる訳にはいかない。

「雪実ちゃん。

私が入るから

そこで見てて。」

杏はず髪をポニーテールにくくりコートに入ってくる。

不安そうな男子達からボールを奪い取りウォーミングアップを始める。

スリーポイントに位置に立ち腕を使いボールを投げる。

みんなが杏に注目していた。

敵の力の判断と

杏のバスケの实力を知るため

誰もはず想像をしない展開だった。

パスッ

「えっ」

星輝は思わず声をあげてしまった。

普通初心者にスリーポイントなんて決めれるハズがない。

「うん、なまってるいな。」

驚いているのは星輝だけでは無かった。

葵も敵も驚いていた。

色んな角度からドリブルをつけシュートをきめていく杏。驚くのは1度も外していないことだった。

「杏ちゃんバスケしてたの？」

葵がきくと杏は恥ずかしそうに答える。

「これでも前の学校ではエースだったんだよ。最近はボールに触れてなかったけど。」

こうして俺らは意外な味方をつけ試合に挑んだ。数える必要もないぐらいシュートは決まっていくな。ダブルスコアになるまで時間はそうかからなかった。

デフェンスの間をくぐりぬけてパスをする。

そのパスは次々に仲間に渡り

ゴールへと運ばれる。

純粹に凄く楽しかった。

ドリブルの音、ゴールの音、葵と杏の掛け声、雪実の応援全てが1つになって心地良い音楽に聞こえた。

「覚えてろよ！」

なんてベタな負け犬台詞を残して3人は去っていった。

「プッ

何あの一言。

弱いやつら。」

4人で爆笑しだす。

こんなに笑顔の杏ははじめてみた。

バスケットを続けて顔を赤らめているけど
凄く綺麗だ。

「杏ちゃんスゴいね。」

雪実はうらやましそうな視線を向ける。

「高校ではバスケットするの?」

葵はただ興味津々って感じた。
でもそれは俺も知りたいから
きいてくれた葵に少し感謝する。

「入らないよ。」

でもマネージャーになってみたいかも。
今日雪実ちゃんをみて
するより支えるのも良いかなって」

雪実はおもわず杏にハグをしていた。
女だったら簡単に抱きしめれたのにな
なんてバカなことを考えてしまう

「杏はそれで良いのか？
バスケットしなくてさ。」

マネージャーになってくれるのは嬉しいけど
杏の希望が1番優先だ。

「うん。」

元々こっちに来た段階でバスケットは辞めるつもりだったんだ。
でも意外な所でバスケット繋がっちゃった。」

前に杏にバスケットは好きかときいた時少しの間があった。
きつと過去に何かがあったんだと思う。
忘れられない重い出来事が

俺らに出会う前の杏を知りたい
彼女の心にある傷を癒したい
そう思うのは贅沢だろうか？
バスケットは俺にとって1番好きなスポーツだし
それは杏も同じだと思う
だからこそ良いイメージだけを持ってほしい
それは全てきつと杏の笑顔に繋がる道だと思うから…

5、美しき蝶の過去は悲しみから始まる（後書き）

あと1話で中学生編完結です。

そのまま高校生編につながります（＾Ｏ＾）

6、全ての蝶としての始まり（前書き）

更新かなり遅かったですね…。
これから早めに頑張ります

6、全ての蝶としての始まり

月日はあつという間にすぎ

杏が来てから1ヶ月が経過し

卒業式は1ヶ月後に控えている。

相変わらず杏と話するのは

俺と雪実と葵と時々夏葉

そして他の男子だけだ

他の女子は全くといって良いほど話しかけようとはしない。
嫌がらせは完璧には消えてない。

でもクラス全体が仲良くなれてる気がする。

本人は自覚ないだろうけど杏のおかげで

「夏葉！

わりい待ったか？」

今は学校に来てすぐだった。

朝早くから夏葉からメールが来て

学校に着いたらすぐに屋上に参考書を持ってきてほしい
というメールだった。

「うっん全然良いよ。

こっちこそ朝からごめんね。」

気まずさは消え普通に他愛ない会話をして参考書を手渡す。
朝からといっても

いつもと同じ時間だから
そこまで時間に余裕はない。
参考書を手渡すと星輝は屋上を去ろうとした。

「ま、待つて！」

去っていかうとした星輝の腕がふいに掴まれる。
両手でしっかりと掴まれてる。

けれど下を向いていて男の力なら簡単に外せそうだった。

「うん？」

どうかしたか？」

頭の中でまとまるまで夏葉の言葉を待つ。

何か用があつたなら

ちゃんときくべきだろう

たとえそれがめんどくさいことでも

宣戦布告でも

「あのね、ずっと言わなきゃいけないって思ってたんだけど…。」

「ああ。」

落ち着けよ。

待つからさ。」

逃げないことがわかると夏葉は腕を離してくれた。

深呼吸して自分を落ち着かせてる。

告白は前にきいたし

何かまだあつたかな？

「ずっと前から謝りたかったの。

佐々木のことと

織田さんのこと。」

「佐々木と杏がどうかしたか？」

佐々木と杏のことと言われればだいたいはわかってた。
でも夏葉は前に1度否定したから
あえてわからないフリをしておく。

「わかってたよね？」

イジメのこと…。

みんなにいじめてって頼んだ訳じゃないよ。
でも煽ったのは私だから…。

ホントにごめんなさい。」

やっぱり夏葉だったか…。

わかってた

けど何故か否定したかった
たぶん夏葉のことを信じてたから

「それは本人に直接謝れよ。

俺は何もされてないんだし。」

進んだ月日は無駄にはならない
それぞれ考えて過ごす時間だ
きっと夏葉も沢山悩んでたハズ
確かに許されないと思う

けど正直に言ってくれたし俺は夏葉を責めない

「ちゃんと織田さんに謝るよ。」

こんなの間違ってるかもしれないけど

私は星輝にとって誇れる友人でありたいの。」

「夏葉…。」

一言で言えば下心かもしれない

けど俺はスゴく嬉しい

それにな夏葉

俺にとってお前はすでに誇れる友人だぜ。

「話はそれだけ。」

去っていかうとした夏葉を追いかける。

そして前にたつと軽く頭を叩いてやる。

ポンポンッ

「えっ」

「ありがとな。」

そう言つて俺は夏葉の前を去った。

ホントは少しでも冷たくして嫌われた方が夏葉のためだと思つてた。
けど夏葉が絶対に諦めないと言つなら

これからも俺はありのままにいる。

もちろん友人として。

別れてからすぐに教室に戻ったが

夏葉は戻って来なかった。

鞆はあったから学校内にはいるんだろう
でもわざわざ探したりはしない
きつと今は1人になりたいと思うから

1限目が終わり2限目が始まる。

「……!!」

ふと杏の席をみると杏がいない
夏葉もまだ戻って来てない。

「おい星輝、杏ちゃんが……。」

同じことに気づいた葵が心配そうな視線を向けてくる。
雪実も同じだった

「大丈夫だ。」

たぶん夏葉と一緒にいるんだろ……。」

「だからこそ心配を」

星輝が大丈夫と言っても心配そうな視線を止めない葵と雪。
ホントは2人だけで話し合って欲しかったけど

葵と雪実に押されて探しにいくことにした
たぶん屋上ってわかってたけどバレないように誤魔化す

その頃屋上では星輝の予想通り杏と夏葉が話し合っていた。

「今までホントにごめんなさい。」

わざわざ授業中に呼ばれた杏
一緒にサボる必要は無かったけど
杏も夏葉と話がしたかった。

「別にいいよ。
たいして気にしてなかったし」

しいていうならうざかったただけだし
傷つくことは何も無かった

「そう…。」

じゃあここからは別の話
私は星輝が好きなの。
貴方に譲るつもりはないから。」

たぶんこっちが1番話したかったことだろう。
転校してきてすぐに気がついてはいた。
だからあんまり星輝に近づきたく無かった
けど彼は今の私にとって特別な人となってしまった。

「簡単に好きっていえる貴方が羨ましいと思う反面憎い。」

急に出てきた杏の孤独な気持ちに夏葉は驚きを隠せなかった。

「何よ。」

好きなら好きって言えば良いじゃない。」

そうとしか言えなかった。

羨ましいと言われたのは気にならないけど
憎いと言われたのは夏葉にとって初めてだったから。

杏もホントはここまで言うつもりは無かった。
でもとっさに言葉が出てしまった。

「私は星輝を引き止めるつもりはないよ。
星輝の意志しだいだって思う。」

この時杏は気づいてなかった。
夏葉意外にもきいていた人がいたことを

「おい星輝。
待てよ！」

「1人にさせてくれよ。」

葵と雪実を止めきれず屋上にたどりついた時にきこえたのが
ちょうどその声だった。
引き止めないってことは
別に好きじゃないってことだよな

1人歩きだした。

屋上には杏達がいるため星輝は仕方なく保健室に向かった。

「くそっ
情けねえ…。」

杏が俺を好きじゃないことぐらいわかってたくせに。」

わかってたけど実際に言われた言葉は星輝の胸を大きく傷つけた。

「…あら星輝くんどうしたの？」

「ベッド借ります。」

星輝に普段の明るさが無いとわかった保健医は何も言わずにうなずきカーテンを閉めてくれる。

ちょうどカーテンが閉まったとき
堪えていた涙がこぼれおち
頬をつたっていった…。

「失恋って痛いんだな…。

俺はこれからどうすれば良いんだろう。」

布団にくるまりながら頭を抱えていた。
どれくらいの時間がたったのなんて考える余裕もなく
心地良い静寂が星輝の横を過ぎていく。

「星輝くん鞆持ってきてもらったから
帰りたい時に帰りなさい。」

「ありがとうございます。」

今日杏と帰れるほど俺は強くない。

星輝が屋上を去ってから担任が4人を教室に連れ戻した。
その時杏は覗かれてたことを知り
星輝がきいていたことを知った。

こちらもまた会いたくない
そう思ってしまったのだった…。

星輝は鞆を受けとるとすぐに家に帰ることにした。
自転車に乗り後ろをみる。

もちろんそこに杏の姿はない。

わからねえよ

すでに生活の一部になってる

お前の傍にいる

それこそが俺の望むこと

家に帰ってからもずっと考えていたが

それしか答えは見つからなかった。

だったら

俺は友人としてこれからも一緒に居続ける。

ふと葵に言われた言葉が頭をよぎる。

「お前杏ちゃんとうなりたいんだ？」

あの時は傍に居るだけで十分だと思ってた
でも残酷なことに

無理だと思えば思うほど関係を求めてしまう。
そうか俺は杏の特別になりたかったんだな…。
たった1人の特別に

翌日

きつと迎えに行かなければ

俺たちには見えない距離が増える。

そんなの堪えれない

だったら気まずくても迎えに行くしか道はない。

少し憂鬱な心持ちで自転車をだし

家を出ようとすると

「おっす!」「おはよ」

2つの重なった声が聞こえる。

「お前ら...。」

葵と雪実朝早くから星輝の家の前にいた。
制服でまた二人乗りをしてきたみたいだ。

「杏ちゃんと2人は気まずいかなと思って
来てやったんだよ!

ありがたく思えよ。」

笑いながらいう葵と違い雪実は何も言わなかった。
ただ笑顔で迎えてくれた。

こんなに2人の大切さを実感したことはあっただろうか?

「さんきゅ。」

少し憂鬱が晴れた気がした。

3人で杏の家を目指す。

あえて2人は何もきいてこない。

話は高校のことか

部活とか

日常生活のことばかりだった。

でも何か話題が出るたびに頭の中で杏と繋がる。

夏葉お前もこんな気持ちだったのか？

同じ高校に通える嬉しさ

そして同じくらいの苦しさ

「星輝？」

「えっ!？」

いつの間にかボーっとしてたのか2人が心配そうな視線を向けてくる。

心配かけちゃった

しっかりしなきゃな

俺たちにはまだまだ終わらない続きがある。

「星輝、私たちだけで迎えに行こうか？」

気をつかってくれているのはわかる

けど俺は…

「そんなん優しくしたら星輝がくだらない男になっちまうだろ!」

「そんなの別に良いじゃない。

葵にはわかんないんだよ。」

雪実も葵も俺のために言い合ってくれてる。

嬉しいけど俺はイヤだ。

「2人ともさんきゅな。
でも俺は大丈夫だ。」

俺はくだらない男にはならないよ。」

「星輝…。」

何てことをしてる間に杏の家についた。
毎日押してきたベルがいつもの何倍も重く感じる。
あと少しが押せない
震える指に2人の手が重なり音になる。

ピンポーン

音がなるとすぐに杏が出てくる。
今までと変わらず後ろにさせる。
手が腰にまわされて
杏の温もりが背中に伝わる。
いつものことなのに
何かむしように切なくて切なくて
涙が出そうになる
そんな星輝に気づいたのか
杏はボソッとつぶやいた。

「ごめんね…
ありがとう。」

絶対に突き刺さると思ってたけど

杏の言葉は不思議と俺のことを慰めた。

「星輝のこと普通の人よりかは特別だからね。
私の大切な人。」

同情なんかじゃなくて本心で伝えてくれる。
特別の意味が恋愛かはわからない
けど俺はちゃんと特別になれてたんだな

「ありがとな。」

より強く腰に手が回されて
涙が出そうな心に温もりを与えてくれた。

かけがえのない貴女
かけがえのない思い出
今この時間は限りなく輝き続ける。

学校に着くまでにいつの間にか気まずさは消えていた。
いつもの俺たちって感じだった。

時間はあっという間に過ぎていき
卒業式もあっという間だった。

最後に杏も俺も沢山の告白をつけて涙に包まれて学校を卒業した。

春休みは高校の準備とかですぐ終わり入学式がやって来る。

「おはよう」

「おはよう、高校でもよろしく。」

高校になっても俺の朝の日課は変わらない。
入学式から視線を集めながら2人乗り登校

高校は少し遠いけど広くて自然が多くて素敵だった。

ここで俺らの新しい生活がはじまる。

「生徒会長から新入生への挨拶です。」

進行の先生の紹介で生徒会長が舞台にあがる。
真面目って感じはない。

けど何だか目を引く人だった。

「新入生の諸君。

入学おめでとう。

こんな場所から長々話す気はない。
でも1つだけ聞いてほしい。

私達の学校は勉強、部活動と
大変充実している。

けれど、ただ生活していても充実した高校生活はおくれない。
それぞれが一步踏み出してこそ始まりがあることを覚えていてほしい。」

高校生

新しい生活

新しいクラスメイト

新しいクラブ

何もかもが変わる

きっと今とは全く違う時間がながれ始めるんだろう

けど俺らの友情と

俺の杏への気持ちに変わりはない

会長が言っていたように

全てにおいて素晴らしき一歩が踏み出せることを祈って

高校生活をスタートさせよう。

6、全ての蝶としての始まり（後書き）

よかったら意見とか言ってくださいね♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2036x/>

運命の扉

2011年12月2日18時49分発行